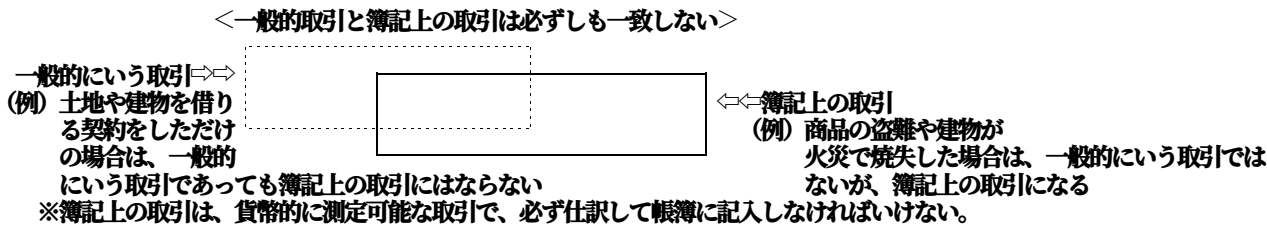


第4章 取引と勘定

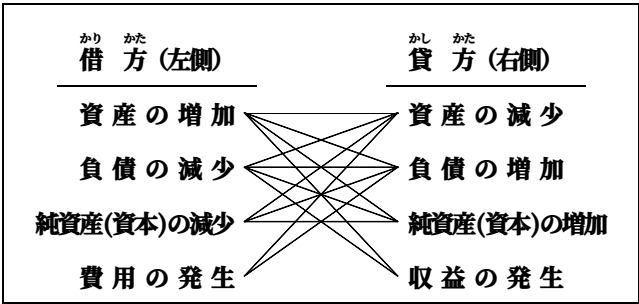
第1節 取引

簿記の対象となるものは、資産、負債、純資産（資本）の増減をとともう経営活動全般で、これを簿記において、「取引」という。
例えば、売買契約や賃貸契約、金銭消費貸借契約といった契約も取引とみることができる。しかし、契約を結んでも、実際に商品やサービスを相手に提供しなければ、資産や負債、純資産（資本）に何ら変化を及ぼすことはないで、簿記上取引にはならない。
また、火災や台風によって商品が汚れたり、建物が壊れたりしても、一般的には取引とは考えないが、それにより資産の価値が減少する場合、簿記上は取引となる。



第2節 基本要素と取引の二面性

複式簿記では、すべての取引について、原因と結果の2つの面から把握し、計算・記帳する。1つの取引は必ず2つの面をもち、これを「取引の二面性」という。簿記上の取引は、資産・負債・純資産（資本）の増加と減少及び収益・費用の発生という8つの取引要素が減り立つ。これを取引の8要素といい、図に示すと次のようになる。



第3節 仕 訳

簿記では、取引を8つの取引要素に分解する。この分解作業を仕訳と称されている。
仕訳とは、簿記上の取引について、借方科目とその金額、貸方科目とその金額について決定することをいう。簿記では、左側のことを借方（または借）右側のことを貸方（または貸）と称しているが、取引要素にこの符号を付けて表示している。
仕訳は、「仕訳帳」という帳簿に、一定のルールにしたがい記入する。そして、仕訳を記入する仕訳帳から総勘定元帳（元帳）の各勘定口座へ転記（移しかえること）することによって、記入違いや記入洩れを防ぐことができる。また、すべての取引を発生順に記入する仕訳帳を見れば、その企業の経営活動を歴史的（発生順）に一覧することができる。

(借方)	(勘定科目)	(金 額)	(貸方)	(勘定科目)	(金 額)
------	--------	-------	------	--------	-------

取引は、借方科目と金額、貸方科目と金額に分けられ、借方、貸方の金額合計は必ず一致する。

取引例

各取引の結合関係を示している。

- ① 現金500円を出資してメディア商店を開業した（これを純資産（資本）の元入れという）。

(取引を分解)	現 金 (資産) の増加	資 本 金 (純資産 (資本)) の増加
	↓	↓
(取引を仕訳)	(借方) 現 金 500	(貸方) 資 本 金 500